

# 久留米の自然



久留米の自然 113号

2011年9月1日

ニホンヒキガエル

*Bufo japonicus japonicus*

撮影年月 1998年5月24日

撮影場所 八女郡広川町長延

撮影者 米田 豊

## ニホンヒキガエル

米田 豊

カエル目（無尾目）ヒキガエル科に属し、頭胴長が8～13cmあり、日本土着種では最大です。ずんぐりとした体形で全身に多数の突起や隆起をもち、体色は茶褐色ですが個体変異に富み、鼓膜から脇腹に赤い斑点が入る個体が多い。鳴嚢をもたないので鳴き声は弱く、「クックッ、クックッ」と鳴きます。ジャンプ力が弱いので移動は主に歩行です。

本種は近畿南部から35度以南の中国地方より南に分布し、これより東・北側では亜種のアズマヒキガエルが分布しています。両種共、生息場所は海岸部から、平野、高山まで広く分布し、以前は人家の庭でも見られていました。かつて金沢市街地の実家の庭にもアズマヒキガエルが時々出没していました。庭の主として畏敬のまなざしで眺めたものでした。ニホンヒキガエルは福岡県のほぼ全域に分布していますが、主な生息地は山間部であり、個体数が非常に減少しています。その原因はわかりませんが、減少傾向が続くため、福岡県の絶滅危惧Ⅱ類にランクされています。がま、わくどと呼ばれています。

林の中で小動物を食べながら生活し、地中で冬眠します。春、冬眠から覚めると産卵場所の池などへ移動します。一つの産卵場所に多数の個体が

集まって雌の争奪合戦が繰り広げられ、これがいわゆる「カエル合戦」です。実家の個体はどこへ行っても合戦をしていたのでしょうか。卵数は約1万個で、2本の長いひも状のゼリーに包まれた卵塊として産下されます。ヒキガエルの寿命はロンドンのある雑誌に12～36年と記載されています。ヒキガエルの耳腺や皮膚からはブフォトキシンと呼ばれる強心作用のある毒性物質が分泌されます。この毒物質のため、天敵は少ないのですが、ヤマカガシは耐性があり、捕食します。毒液が眼に入ると、ヤマカガシ同様に、かなり強い眼障害（結膜の充血腫脹、角膜の混濁、虹彩炎など）を起こします。

なお、元金沢大学の奥野良之助先生の著書「金沢城のヒキガエル—競争なき社会に生きる」（平凡社ライブラリー、2006年発行、1400円）はガマの生態ばかりでなく、学問、科学、近代社会を問う直す名作であり、評論家の紀田順一郎氏は「名随筆にして独創的な警醒の書」として解説しています。ガマに関心のない方にもお薦めする本です。また、戸木田菊治著の「カエル行状記」（博報堂、1962年発行）は弓削道鏡とカエル、ガマの仙術、ガマの油売り、カエルに関する故事・物語なども紹介されていて楽しく読めます。

## 久留米市の蝶46

### タイワンツバメシジミ 国分 謙一

初秋になると高良内町杉谷で、少し前に問題になったゴミ埋立地周辺を中心とした場所に多く発生し、各地から採集に来られていました。昭和30年代は非常に多かったのですが40年代後半にはすでに久留米市では絶滅したと思われる蝶の一つです。(当時は非常に多くて採集して減ったのではないですよ)

日本では九州、四国、和歌山県で記録がありますが棲息している地点は局所的で何処でもはいません。

秋に1回だけですが、鹿児島県の一部や沖縄ではシバハギの開花に合わせて2回以上発生するそうです。会誌105号のジャノメチョウと同じく人間が何もしなくなったから各地で絶滅に向かって“ばく進”していると思われる蝶で、絶滅危惧種に指定され場所によっては採集禁止になっています。

幼虫の食草はシバハギですが、シバハギがあっても生息しているとは限りません。久留米市でも当時分布調査をされていますが、微妙な条件が揃わないと発生しないようで、少し離れるとシバハギが多くあっても棲息していないとの報告があります。現在でもこの条件ははっきりとは判っていません。(成虫の吸蜜する花、蛹になる為のその近辺の植物の成長状態等が関係すると言われていました。)

### 知識の集積と自然保護を考える

人類の知識の集積と自然保護とはどのようなものかを、私達はよく考えたほうが良いのかも知れません。

私たち人類は生存する為に知識の集積を図ってきて、産業革命以前は食べるために生物をいかに効率よく生産させるかが一番の問題で、江戸時代以前から害虫駆除の方法や薬剤が試行錯誤されてきました。現在はその研究のスピードが非常に速く遺伝子を組みかえることも行われてきています(人間は神様ではないので何時かノアの箱舟と同じように罰せられるかも知れないとは思っていますが)、私達は文明の進歩という旗印の下に、自

然現象を探求して知識の集積を図って文明を築き上げてきました。その結果に対して自然を破壊したので保護すべきとの声を上げる人々が現れて来た事は間違いありません。蚊やハエは昔から駆除の対象となり、近所の商店に行けば色々な殺虫剤を販売しています。某大な時間と労力をかけても絶滅できない昆虫がいる、何もしなくても絶滅する昆虫がいる、蚊やハエ、ゴキブリは何故絶滅しないのでしょうか?知識が不足しているから?

絶滅を心配しているのは、その生物を研究している者がその研究対象がいなくなるのを一番心配しているのです。

### (矛盾)、自然を破壊する行為?

日本各地で草原性の蝶の保護活動をしているとの報告を良く見聞きすることがあり、マスコミでもその行為を美談とする報道や記事を見ますが、その内容は草原を維持する為に植物を伐採し焼き払っている行為です。その時代採された植物は何の為にそこに生育したのでしょうか。植物が人間と対話できたら「私たち植物は死刑にされるような罪を犯したのでしょうか」と語りかけるのでは?この行為は美談であり自然破壊を行っているとしては非難されていません不思議ですね?

これは保護すべき生物を小さく捉えているからだと思います。昆虫の研究者は昆虫を保護しなければならないから昆虫を食べる鳥を減らさなければ、鳥の研究者は餌の昆虫を増やさなければ、植物の研究者は植物を食べる昆虫を防除しなければならないと?

タイワンツバメシジミは自然保護はどのようにしたら良いかを考えさせる蝶の一つです。

### 久留米市での観察

まず可能性はないと思いますが、8月末から10月初めに、土木工事や伐採された箇所(自然を破壊した?)でシバハギが多くある場所を探すと見つけることができるかも知れません。チラチラと飛び小さな花に訪れていますし湿った場所にも集まります。ソックリな蝶も同時にいますので図鑑などで確認してください。人知れず耳納山地のどこかに棲息していて欲しいと願うものです。

## 郷土の樹木 14

## ケヤキ

## 猪上 信義

ニレ科の落葉高木、樹皮は若いときは灰白色で滑らかですが、成長するにつれ、鱗状に剥がれ落ちるようになります。葉は互生し、卵状楕円形で長さ3~7cm、幅2~4cmで、鋸歯があり、表面はざらつきます。葉脈ははっきりしていて、鋸歯の先まで達します。花は4月頃、新葉とともに開き、雌雄同体ですが、雄花は枝の下部に、雌花は枝上部の葉の付け根に着きます。果実はいびつな球形で、直径4~5mmで、10月頃灰黒色に熟します。果実の付いた枝では他の枝の葉のようには大きくならず、しかも秋になっても葉に離層ができず、後に小枝ごと落ちることで果実を風に乗せて遠くに運ぶ働きをします。



ケヤキの葉裏 (右が結実枝)

日本の本州、四国、九州、それに朝鮮半島、台湾、中国中部に分布し、溪流沿いや肥沃な場所に生えます。成長が早く、端正な樹形となり、高さは20m、胸高直径が1m以上に達するものが多く見られます。山形県東根市にあるケヤキは幹回り12.6m(直径約4m)、樹高28mあり、国の特別天然記念物に指定されています。

語源は「ケヤケン」(際立って目立つ、あるいは貴重なものという古語)とされています。

材は環孔材(カンコウザイ・・・年輪に沿って

太めの導管が並ぶもの)で木目が美しく、狂いが少ないので、昔から社寺などの大型建造物によく使われます。中でも京都清水寺の「舞台」が140本ほどの巨大なケヤキの柱で支えられているのは有名です。また仏像や家具、各種器具材などにも利用されます。そのひとつ和太鼓の胴はケヤキを使うのが当たり前でしたが、いまでは材料が手に入りにくいために、由緒あるものは別として、普通のものには他の木(シオジやハリギリ)が使われるようです。

天然では、内陸の溪流沿いや標高の高いガレ場、崩壊跡地などに生えるため、久留米市内で自生している場所はないようです。しかし雄大な樹形と有用な材がとれることで、昔から各地で植えられています。善導寺の境内にも木の集団がみられますが、その下に車が入りしているために、土が踏みつけられて、弱った木が増えています。また全国各地でも街路樹として植えられています。電線や建物、交通標識などの障害になるということで、無惨な剪定が繰り返されるのが常です。その点JR久留米駅東から旭町交差点にかけての並木は、無理な剪定が行われずに、ケヤキ本来の樹形が保たれている稀な例です。

雄大な樹形や溪流沿いのケヤキ林を思い浮かべてか、記念植樹やボランティア植樹などに使われることの多い木ですが、その後を見ると、うまく成長しなかったり、虫の害(多くはクワカミキリ)にやられたりして、きれいな状態を見たためしがありません。その原因は人間の思いだけが先行して、本来ケヤキがよく成長する場所に植えていないことに尽きます。一時的には雑草を除去したり、肥料を与えたりして多少の手助けは出来ますが、何十年、何百年という木の生長には気候と土壌という自然条件にゆだねるわけですので、そのことを考慮して、木の種類を選ぶべきではないでしょうか。



## 高良川流域のキノコ(その15)

角 正博

これらを参考に、まずコウヤクタケ科のキノコから見ていきます。高良山系および高良川流域に見られるコウヤクタケ科のキノコには、アイコウヤクタケ、カミウロコタケ、ヒイロハリタケ、コメバタケの仲間があります。高良川流域のコメバタケの仲間は、数種あると思われますが、よくわかりません。

## 26. アイコウヤクタケ(藍膏葉茸)

*Pulcherricium caeruleum* (写真1)

高良山系および高良川流域では、広葉樹林内や林縁の落枝に晩秋から翌春にかけて、見られます。

子実体は、背着生で生時はしばしば鮮やかな青藍色～深紫色です。子実体が古くなるに従い次第に黒ずんで、見かけは炭化したような色合いとなり、古い子実体では炭藍色～黒紫色となります。子実体は平坦で、広葉樹の落枝などの基物に圧着するようにして、膜状に広がります。まさしく落枝に青藍色の膏葉を貼ったようです。腐朽材は白っぽくなり、白色腐朽菌です。

27. カミウロコタケ(紙鱗茸) *Lopharia**crassa*: *Stereum umbrinum* (写真2)

これも高良山系および高良川流域では、コナラまじりのコジイ林の林内の広葉樹の落枝に冬から春にかけて見られます。

子実体は半背着生で、膜状に広がり、上部が少し反転して狭い棚状～時に狭い半円状の傘を作ります。傘の上面は短毛で覆われ汚白色で、しばしば浅い環溝をあらわします。傘の下面(子実層面)は、平滑、新鮮な間はきれいな紫色～淡紫色ですが、次第に褪色して淡灰褐色に変わります。傘の下面は、乾燥すると亀裂を生じます。子実体をつまむと弾力のあるフェルト質です。皮層と肉の分化はありません。

## 28. ヒイロハリタケ(緋色針茸)

*Hydnophlebia chrysorrhiza*

高良山系では、春～秋に、コナラまじりのコジイ林の遊歩道沿いの、やや暗く湿った落葉堆積層に落下した、広葉樹のかなり腐朽の進んだ落枝上に見られます。

子実体は背着生で、膜状に広がりますが、基物からは比較的容易に剥離します。子実層面(子実層托)は長さ1～4mm以内の細く先の尖った針状で、鮮やかな橙赤色～黄橙色で目立ちます。周縁部には橙赤色～黄橙色の長い糸状の菌糸束が発達します。乾燥すると子実体の鮮やかな橙赤色は褪色して、褐色となります。



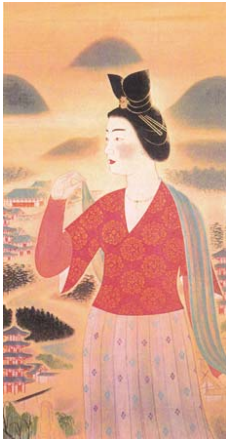
写真1: アイコウヤクタケ



写真2: カミウロコタケ

ぬかたのおおきみ  
万葉歌人 額田女王と朝倉宮

久留米市文化財専門委員 高山美子



参考文献  
井上靖著  
中央公論社刊

福岡県朝倉市に斉明天皇が百済救援の行宮を造営したのは662年。難波を出て、海路を進み大伯海を経て天皇一行は四国松山の熱田津(道後温泉)で、完工までの月日を待っていた。「熱田津に船乗りせむと月待てば潮もかなひぬ今は榜ぎ出でな」万葉集のこの額田女王の詠んだ歌は有名で、当時皇太子であった中大兄皇子は36歳。全船団の総指揮を取っていた。四国松山の港を出た船団は、瀬戸内海を進み、九州筑紫の那の大洋(現博多港)をめざした。

難波の旧都を出たのが1月6日、(現)博多港に到着したのは3月25日、2ヶ月半の旅の後盤瀬飯宮に天皇と額田は入り、朝倉宮に移ってしばらく後の7月24日斉明天皇が突然の病の為朝倉宮に崩じた。悲しみの中、中大兄皇子は柩を見送るとき母帝に別れの心優しい歌を詠んだ。「君が目の恋しきからに泊てて居てかくや恋ひむも君が目を欲り」(中大兄皇子詠)若き額田は弟の大海人皇子との間にすでに十市皇女をもうけていた。しかし、兄中大兄皇子の力強い求愛を受け続け神に仕える身として神の声を聞き祈る立場をつらぬくことを決めながら、二人の皇子の熱き寵を一身に受けその骨肉相争う葛藤の狭間で女ゆえの愛と苦悩で時代の荒波にゆれ続けていた。大陸に出兵した後、那の津や巷では混乱が続く朝倉の宮でも鬼

火が出没、中大兄や額田の身边を飛び交い、鬼火と鬼火が戦い、大きく炎となつて足元をすくませた。ちょうどその時、半島の白村江では、大きな合戦があり大和の軍は大敗。海は血で朱に染まった。おびたしい命が、海の底に沈んだ。大陸からの恐ろしい仕返しに残党兵や百済の難民は筑紫ににげ帰り、巷、国難をきわめた。失意の中、大和に帰った大兄と大海人、額田や間人も連れ立って帰った。

5月5日「茜さす紫野行きしめ野行き野守は見ずや君が袖振る」(額田詠)蒲生野の狩り宴での詠「紫草のにはほへる妹を憎くあらば人妻ゆゑに吾恋ひめやも」(大海人詠)7年正月3日、中大兄皇子は天智天皇即位の儀を行った。比叡山を背後に湖を前に望む近江に都を遷し、「味酒三輪の山あをによし奈良の山の山の際にい隠るまで道の隈い積るまでにつばらにも見つ行かむをしばしばも見放けむ山を情なく雲の隠さふべしや」(額田)天智天皇崩き後、額田の子、十市皇女も若くして亡くなった。失意の中、額田女王の姿は消えて歌も詠むことはなかった。

ひととき 動物笑話 その57  
ペンギン(人鳥) 米田豊

ペンギンは水族館や動物園の人気者である。水中を時速40kmを超える速さで泳ぎ、潜水も得意で、コウテイペンギンが水深265mの深さにまで潜った記録がある。地上では直立して歩き、その姿から人鳥と呼ばれる。空は飛べないが、飼育舎の下からガラス越しに見上げるペンギンの泳ぎはまさに空を飛ぶがごとくである。春先のある動物園、今日はペンギンが飼育舎から出されてより身近に見れると言うので、近くの幼稚園の園児達が見学を訪れた。ヨチヨチ歩く姿に「かわいい!」の声が連発された。が、新米の飼育係が「今日のペンギンの行進は上手にできていますよ」と言ったところ、園児から「1、2、1、2とちゃんと前後に翼をふって歩いていないじゃん」「横歩きで整列できないじゃん」などと言われ、言葉に詰まった飼育係は極寒に耐えるペンギンのように頭を垂れ、硬直した。  
\*ペンギン科に属し、体長は30~100cm。南極大陸を中心に南半球に15種が分布。集団繁殖する。

## 高良川流域の地衣類(その3)

角 正博

さらにもう少し、地衣類の観察の際に留意しておく点と便利なポイントについて、述べたいと思います。

## 3. 地衣類の分け方

地衣類には、便宜上いくつかの分け方があります。主なものに(1)形状による区別、(2)菌類による区別、(3)共生藻による区別、(4)着生基物による区別があります。

(1)形状による区別では、キゴケ属やトゲシバリ等のように樹枝状に分岐したり、サルオガセ等のように紐状で垂れ下がったりしている地衣類を(イ)樹状地衣、ウメノキゴケ等のように、植物の葉のように平べったく、腹面の偽根などで樹皮や岩等に着生している地衣類を(ロ)葉状地衣、ヘリトリゴケ等のように岩や樹皮の表面に薄く、無定形に広がり固着する(ハ)固着(痂状)地衣の三つに分けます。

(2)菌類による区別では、地衣を構成する菌類が子嚢菌の場合を(イ)子嚢地衣類、アリノタイマツ等のように、地衣を構成する菌類が担子菌の場合を(ロ)担子地衣類と呼んでいます。菌類が地衣体をつくることを「地衣化する」と呼びます。地衣化した菌類を「地衣化菌類」と呼びます。地球上で現在知られている全菌類(菌類既知種64,000種)の約21%の種が地衣類として生育(地衣化)しています。日本の地衣類の場合、約97%が子嚢地衣で占められています。また子嚢菌類全体の約43%(37目中16目)が地衣化しています。したがって地衣化は、子嚢菌というキノコやカビを作る菌類が進化の過程で選んだ適応戦略であり、これもキノコやカビの一つの姿なのです。



## 例会報告

## 第390回例会

キノコ観察とキノコ汁会

丸山由紀子

6月26日(日)高良台でキノコ観察会を行いました。自衛隊の演習場への立ち入りができなくなり、今回はその周辺での観察ということになりましたがそれでも33種のキノコたちと出会うことができました。森林林業技術センターの金子周平先生を講師にお迎えし単にキノコの説明だけでなく、「分解者」としてのキノコの役割など今回も興味深いお話を聞かせていただきました。参加者はキノコ観察の常連さんから初参加の方まで10名でしたがみなさんとても熱心にキノコウォッチングを楽しんでいました。同じ時期にまたここに来たととしてもみつかるとは限らないというキノコとの“一期一会”を楽しみながらアンズタケのあざやかな色に感心しツチグリカタカワタケを割ってみて(写真)ほおーと驚きと、金子先生のご指導のもとキノコ自体のへんてこな色や形・においを十分に味わいました。迷路を解くことができると話題になっているムラサキホコリカビ(粘菌)を見ることができたのも今回の大きな収穫のひとつでした。

何とか雨も降らず会長がほとんど徹夜でつくったおいしいキノコ汁とキノコご飯を味わいながらキノコや環境についてのよもやま話をして会は終了となりました。



## 参加者の感想

久留米市津福本町 岡部一男

キノコと言えば、しいたけ、しめじがすぐ浮かびます。キノコの米つぶのすがたを見て、自然と共生という言葉がうかんできました。キノコも自然の中で知恵をしぼって生きているのがすごく印象に残りました。

久留米市西町 川原和夫

キノコ観察会に参加して初めての経験で大変勉強になりました。久留米でも自然林を残していかなければならないと痛感しました。樹木の話も会長からお聞きして大変参考になりました。

柳川市大和町 千蔵正弘

久留米の自然を守る会主催の「キノコ観察会」に始めて参加させて頂きました。キノコの種類は多すぎてなかなか覚えることは出来ませんが身近にこんなにキノコが生えているとはおどろきでした。時々、山歩きするのですがキノコの本を持ってきて勉強していきたいと思います。



アンズタケ



ツチグリカタカワタケ

## 2011年度久留米自然を守る会きのご観察会報告

金子 周平

2011年度も高良台で6月26日(日)に行われました。雨模様の続く中降られることもなく開催されました。小さなものから大型のものまでさまざまなきのこを観察することができました。きのこごはん、きのこ鍋の昼食もおいしく、芝生の上で楽しくいただきました。参加者は10名でした。きのこ料理を準備していただいた橋田先生ありがとうございました。

### 採集きのこ

担子菌亜門異形担子菌綱キクラゲ目キクラゲ科

#### 1) アラゲキクラゲ

真正担子菌綱帽菌亜綱ヒダナシタケ目アンズタケ科 2) アンズタケカレエダタケ科 3) カレエダタケの仲間

Stereaceae ウロコタケ科 4) モミジウロコタケ

Steccherinaceae ニクハリタケ科 5) ウスバタケ

サルノコシカケ科 6) オシロイタケの一種 7) アナタケ 8) ブドウタケ 9) キアシグロタケ 10) ニッケイタケ 11) アラゲカワラタケ 12) カワラタケ

マンネンタケ科 13) マンネンタケ

Hymenochaetaceae タバコウロコタケ科 14) キウロコタケ

ヌメリガサ科 15) アカヤマタケ

キシメジ科 16) キツネタケ属 17) カレバキツネタケ 18) モリノカレバタケ属 19) ホウライタケ属

テングタケ科 20) タマゴテングタケモドキ

モエギタケ科 21) ニガクリタケ

Cortinariaceae フウセンタケ科 22) アセタケ属 (コブアセタケ?) 23) フウセンタケ属

Paxillaceae ヒダハタケ科 24) サケバタケ

イグチ科 25) チチアワタケ 26) ミドリニガイ

グチ 27) ニガイグチ属

ベニタケ科 28) クロハツモドキ 29) ニオイワチチタケ

Gasteromycetidae 腹菌亜綱

Sclerodermatales ニセシヨウロ目ニセシヨウロ科 30) ヒメカタシヨウロ 31) ツチグリカタカワタケ

子のう菌亜門盤菌綱ビョウタケ目キンカクキン科 32) ニセキンカクアカビョウタケ

核菌綱クロサイワイタケ目クロサイワイタケ科 33) クロコブタケの一種

参考文献

今関六也・大谷吉雄・本郷次雄編. 1988. 山溪カラー名鑑日本のきのこ. 山と溪谷社. 東京.

今関六也・本郷次雄. 1987. 原色日本新菌類図鑑 (I). 保育社. 大阪.

今関六也・本郷次雄. 1989. 原色日本新菌類図鑑 (II). 保育社. 大阪.

城川四郎. 1996. 猿の腰掛け類きのこ図鑑. 地球社. 東京.

本郷次雄監修. 1994. 山溪フィールドブック (10) きのこ. 山と溪谷社. 東京.

幼菌の会編. 2001. きのこ図鑑. 家の光協会. 東京.

### 第391回例会

#### 「水辺の自然観察会と魚ツチング教室」

石橋一也

7月18日(月)に「水辺の自然観察会」を開催しました。今年の参加者は、総勢20名。いつものなら、くるめウスで事前説明となるところですが、今回は挨拶と諸注意をくるめウスの玄関前で行い、さっそく川へと向かいました。流れは昨年ほど速くはないように感じましたが、小雨交じりの天候で、子供達も多いので油断は禁物、注意を払いながらの観察です。

子供も大人も童心に帰って網を操り、観察をしている姿が印象的で、くるめウス付近から久留米

東バイパスの橋までを、心配された雨にも大きく降られることなく、約2時間かけて観察、採集をしました。

その後、「ヒナモロコ郷づくりの会」の山崎修平氏から魚類について説明がありました。一番の大物はカムルチー(雷魚)、言わずと知れた外来魚、でした。雷魚とはタイワンドジョウ科に属する魚の総称で、カムルチーの他にタイワンドジョウ(ライヒー)などがあるようです。昨年はカムルチーを初めとした外来魚は観察されませんでした。今回は3種を観察しています。ちなみにこれら外来魚(外来生物)はいわゆる外来生物法で、特定外来生物、未判定外来生物、要注意外来生物の3種に分類されており、オオクチバス、ブルーギルは特定外来生物に、カムルチーは要注意外来生物に、それぞれ区分されています。

いずれにしても、今回もたくさんの生物を目の当たりにし、この川の豊かさを再実感させられました。

＜今回観察された主な水生生物＞

魚類 オイカワ、カワムツ、カマツカ、トウヨシノボリ、オヤニラミ、カムルチー(帰化)、ブルーギル(帰化) オオクチバス(帰化) 8種

底生生物 シロタニガワカゲロウ、シマイシビル、プラナリア、ミズムシ、コガタシマトビケラ、コオニヤンマ、ヒラタビル 7種

水生植物 オオカナダモ、コカナダモ、ホザキノフサモ、フサモ、ササバモ、エビモ 6種



高良川で魚を捕る子ども



生き物に魅せられて その51

アリの巻 松永紀代子

2010年7月、庭ではアブラゼミの羽化が続いていた。でも、たまに失敗するのがいて、動かなくなっている。そんな1匹がグミの衰退木にいた。

死骸の側では、先日までアミメアリが幹の表面に木屑をびっしりはりつけていたが、この時は、木の穴の中に移動していた。

アブラゼミの死骸に初めてやってきたのは、ヒメアリだった。翌日はお客が変わって、シリアゲアリ。その次はアミメアリ。雨が降って客足がとだえた。そして、晴れた日、またアミメアリがやってきた。

ところが、その翌朝にはシリアゲアリがたかっていた。彼らの間にどんな攻防があったのだろう。シリアゲアリは、グミの幹を少しばらけて上ってきていた。なぜだろう？ その時、アミメアリが自分たちの木屑の上に沢山でおり、じっとしているのに気がついた。普段彼らは移動に忙しいのだけど、このときは、微動だにしない。シリアゲアリは彼らを避けて餌さにたどりついていたのだ。別種のアリから陣を守るというアミメアリの行動だろうか。1時間後、アミメアリの一部が移動を始めていた。もっと良い場所を見つけたのかもしれない。

筑後川支流金丸川の近況
筑後川水系 河川環境保全モニター
野口勝司

金丸川流域

筑後大堰建設以来拡張、改良が続き中流の花畑付近から西へ津福 JR ガード下を潜り柳川県道を経て西田西（中央浄化センター）で池町川を併合して大堰下で筑後川に合流しているのがこの間流域の改良（川の曲折部、旧堤防、旧石垣、旧水堰、拡張など）この間川岸、川底、川の周辺的环境も変わり生息する鳥類をはじめ、水棲生物に影響が出ると思われる。またここ数年梅雨時の集中豪雨

で土石流の堆積も生じ浚渫工事にも必要におもわれる。

大堰建設以来潮の流れが変わり、金丸川河口より上流へ1.5km付近まで筑後川の水が逆流してくる。従って富栄養化物の堆積の結果沿岸樹木の成長が著しい

中下流域（池尻橋一上鶴橋）河岸改良工事の結果景観は明るく見通しは良くなったが鴨の群れが見られないのは寂しい思いがする。

平成23年7月

河川愛護月間及び「私たちの活動報告会」

古賀 信夫

7月1日～31日は河川愛護月間として筑後川流域の環境団体の活動展示と報告会がくるめウスにて行われました。

当会では一年間の活動を模造紙にして同期間展示しました。また、7月17日には同所において「私たちの活動報告会」が開催されました。当会では一年間の活動をパワーポイントにまとめ発表をおこないました。



発表する古賀事務局長

## 《行事案内》

## ◇ 第392回例会：

## 筑後川観月会

天体観察と星座、語りべ、お抹茶もいただきます。事前に申し込みをお願いします。

〔日 時〕：9月3日(日) 雨天中止

〔集合・解散〕：19:00 21:00 くるめウス

〔参加費〕：300円 定員30名

〔持参するもの〕：筆記用具

## ◇ 第393回例会：

## ネイチャーゲームと自然観察会

自然観察を行いながら、高良山四季の森を通り、森林公園へいきます。そこで、ネイチャーゲームをします。事前申し込みをお願いします。

〔日 時〕：10月16日(日) 雨天中止

〔集合・解散〕：10:00 15:30 高良内幼稚園駐車場

〔参加費〕：無料 定員30名

〔持参する物〕：水筒、帽子、筆記用具

〔共催〕：久留米市農政部生産流通課

くるめネイチャーゲームの会

## ◇ 第394回例会：

## 高良山キノコ観察会とキノコ汁会

高良山をキノコの観察をしながら、四季の森を通り、森林公園へいきます。事前申し込みをお願いします。

〔日 時〕：12月4日(日) 雨天中止

〔集合・解散〕：10:00 15:30 高良内幼稚園駐車場

〔参加費〕：300円 定員20名

〔持参する物〕：帽子、お茶、筆記用具

〔共催〕：久留米市農政部生産流通課

## ◇ 第395回例会：

## 総会と講演会

〔日 時〕：平成24年1月22日(日)

〔総会・講演会〕：13:30 総会 14:30 講演会

〔会 場〕：久留米市役所3階会議室

## 《事務局だより》

8月も終わりの今、なんだかとても天気が不安定です。昨日も福岡市や田主丸では竜巻が発生したとの報道がありました。竜巻なんて外国での話とっていましたがここ数年日本でも発生が伝えられています。今年は3月に大きな自然災害が発生しましたが、自然の恐ろしさを改めて考え直す年になりそうです。自然のサイクルは私たちの感覚よりも長いものなので先人からの教えとか情報の共有とかそしてなによりも人と人との絆が命を守るためにも重要になってくると思われます。

(古賀信夫)

ホームページもご覧下さい。

<http://kurumenoshizen.net/>

## 1. 会員異動

入会 川原和夫(久留米市)

## 2. 会費納入について

会費は、会の活動を支える源です。まだ、会費を納入していない人は振替用紙(口座番号01750-1-40114)に年会費2000円をご確認のうえ納入をお願いします。

## 3. 原稿募集

次号114号は平成24年1月1日発行予定です。原稿の〆切は12月1日です。皆さんの原稿をお待ちします。

## 4. 幹事会兼事務局会議のご案内

幹事会(定例)は原則として奇数月第1水曜日の19:00~21:00まで、えーるピア2Fで行います。皆さんも気軽にご参加下さい。(9月7日、11月2日、1月11日)

久留米の自然

平成23年9月1日第113号

発行 久留米の自然を守る会

発行者 橋田沙弓

事務局 〒839-0827

久留米市山本町豊田2320-6

TEL 46-8622 FAX 46-8623 (古賀)

印刷 千年屋印刷

TEL 43-2400 FAX 43-2408